
怪盗 i c e の予告状

頼白井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗iceの予告状

【Nコード】

N7088A

【作者名】

頬白井

【あらすじ】

なんともダラけた新聞部に、怪盗からの予告状が舞い込んだ！予告どおり原稿は盗まれてしまうのか？怪盗iceの正体は？新聞部員の二人がダラけたままで挑みます。

（前書き）

この物語はフィクションであり、実在の人物、怪盗、予告状とは一切の関係はありません。……怪盗？予告状？

一日目

「ヒマだねえ……」

春日ツクシ（かすが つくし）は、新聞部部室の机に突っ伏すと、そう呟いた。普段は元気いっぱいの彼女だが、いまはダラダラとしていて、覇気がない。

「嵐の前の静けさだろ。夏休み前になれば、去年みたいに文化祭の出し物が決まる。そしたら、『ヒマ』なんて言ってるヒマがなくなるぞ」

同じく新聞部の桜井龍人が、ツクシに声をかける。端正な顔つきに、メガネと、とても知的な印象がある。

「そんな『オール・オア・ナッシング』っぷり全開なスケジュール、止めてほしいなあ……」

「俺もそうしたいけど、まだ第一希望の提出日前だから、事前調査も中間発表の準備もできない」

別々のクラスで、出し物が重複した場合、文化祭実行委員会で協議され、どちらかが変更することになる。その協議前の情報すら、まだない。

「じゃあ、通常原稿は？」

ツクシも解っているはずだが、訊いた。

「俺もツクシも、無事脱稿」

「印刷は？」

「このままプリンタが徹夜」

「来週はどーするの？」

彼らは週刊で新聞を発行し、全校生徒に配布している。社会的なニュースを解説したり、そのニュースが自分たちにどう関わるかを

分かり易く書いているため、人気は高い。社会科の教師が、教材に使ったこともある。

「さあ？ 今週の内容、2日も早いから、まだ何も」

「頑張りすぎた？」

「かもね」

「帰ろっか？」

「そうしよう」

非常にゆつたりと、二人は帰路についた。

二日目

「大変っ！ 部室にこんな物がっ！」

放課後、龍人が部室に入るなり、ツクシが血相を変えて詰め寄ってきた。

「どんなの？」

龍人が聞き返すと、ツクシはトランプ大のカードを差し出した。

「えーっと、『明日の十七時、原稿を戴きに参上する。怪盗ice』

怪盗ice？ 聞いたことないな」

「私も」

「『怪盗ice』ねえ……解凍アイス……溶けたアイスはマズいだろ」

「……そだね……」

龍人の冗談に、なおざりな反応を示すツクシ。

「ともかく、記事にならないな」

「そーね。『怪盗』なんて非現実的だもんねえ……記事にしたらバカにされるよ……」

彼らは報道のスタンスで記事を書いている。怪盗のような存在の記事など、現実にも起きて非現実なのでネタにできないのだ。

「怪盗ねえ……ツクシ、怪盗といえば？」

ツクシは少し考える素振りを見せてから応える。「ルパンでしょ……紳士でしょ、KIDでしょ……あ、ルパンの三代目もそうだね」

「それくらいか？」

「後は……蒼い風」

「誰だ？ それ」

「……まあ、無理は承知だったからねえ……」

ツクシはジュニア小説、いわゆるライトノベルの趣味がある。おそらく、そのあたりに出てくる怪盗なのだろう。

「後、二十面相！」

「それは『怪人』だ」

「じゃあ21面相……」

「それは『かい人』だ、わざとだろ」

「……バレた？」

「新聞部をナメるな」

もっとも、相手も新聞部員だが。

「……まあ、怪盗談義はこれくらいで……さてどうしよう」

「盗むも何も、印刷終わったんでしょ？」

「終わってるよ。後は明日の放課後に、職員室の配布物ボックスに入れるだけ」

「じゃあ原稿盗まれたら嫌だけど、別に被害は小さいってことね」

一応、各原稿データは、それぞれがバックアップを取って所持している。盗まれたとしても、痛手はない。

「意味ないな」

「……リユート、ヒマだから相手してあげれば？」

「そうだな。明日CDに焼いて持ってくるか。去年度のデータ」

むしろ同情されているような、怪盗iceであった。

三日目、または予告当日

「『部室には警官隊を配備した！ 原稿データCDは厚さ五ミリの強化プラスチックのケースに入れてある！ 怪盗iceめ！ 盗れるものなら盗ってみろ！』って、言うチャンスなのに、なんでやる気が出ないんだろ？」

ツクシは、大仰なセリフを一息に言いながらも、モチベーションの低下を訴える。予告の時間まで後十分。それなのに、この調子だ。「盗られても困らないからだろ？」

過去のデータを入れたCDは、レベル面に“原稿データ”と書いて、隅にある応接テーブルに置いてある。ツクシのセリフとは真逆で、まったくの無警戒。唯一合っているのはプラスチックのケースに入れてあることだが、強化プラスチックではない上に、厚さ一ミリ程度の普通のCDケースだ。

「なあツクシ、昨日プリントアウトした最新号五百部、持ってってもらおうか？」

龍人の発言に、ツクシは目を見開いて驚く。

「そ……それはマズいでしょ？」

ところが、龍人はまったく澄ました顔。

「別にマズくない。なんなら、最新号のデータを持ってってもらっても構わない」

言うが否や、龍人は応接テーブルに最新号と、そのデータを入れたUSBメモリまで置く始末。

「大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だ」

予告の時間まで、一分を切る。秒針が後一周すれば予告の時間だというのに、龍人はツクシに語り続ける。

「大丈夫だ、絶対に」

「な……なんで？」

そして、十七時のチャイムが鳴ったと同時に、龍人はその理由を

告げた。

「怪盗iceは、ツクシだからさ」

「なんで解ったの？」 ツクシはそう言っているが、龍人がすでに見越していることを、理解しているようだ。おそらく、自分が作ったクイズを、龍人がどう解いたかを聞きたいのだろう。

「見た瞬間解ったよ。携帯電話で『ツクシ』は『4』を三回、『2』を三回、『3』を二回押す。この通りに、アルファベットモードで入力すると……」

「ピンポン！」

明るい笑顔で言う。一応“犯人”で、看破された後だが。

「後、この最新号の原稿が、二日も早く脱稿してた。だから今日を予告したんだろ？」

「うん。今日までなら、まだこーゆージョークができるから」

「……他にも、予告状を持ってきたのはツクシ。『怪盗iceの相手をすればいい』って言ったのもツクシ……」

「その通りだよ」

「ま、ヒマ潰しにはなったな。さて、怪盗iceさん。原稿とか持っていないんですか？」

龍人は応接テーブルの原稿データCDやUSBメモリを手で指し示す。

「えっ？ バレたんだからいいよ」

「いや、持っていくんだ。最新号を、職員室の配布物ボックスまで」

龍人は笑顔で言う。怪盗iceは、山のような最新号の束を、呆然と眺めるのみだった。

（後書き）

超短編という、単発ネタです。ほんの少しミステリってますが、どちらかというとギャグ。まあ、カテゴリは推理ですが。

というわけで、お読みいただきありがとうございます。感想等戴けますと、マジで励みになりますし、参考になりますので、よろしく願います。

重ね重ね、お読みいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7088a/>

怪盗iceの予告状

2010年10月8日15時44分発行